

もう一つの世界 [二]

緑川すゞ子

第一章 もう一つの世界

「洋服は好きですか」

「はい」

「家はどちら」

「合川町です」

「今日はどうやってここまで来たの？」

「歩いて参りました」

質問はたったこれだけだった。

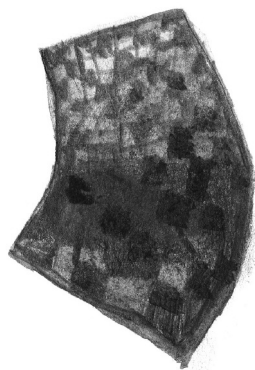
古賀部長と呼ばれた男は、上体を引いて、美也の頭から

爪先まで視線を「往復させた。

「いいじゃないですか」と武谷^{たけや}に頷き、「午後は小倉で会

議なので、失敬」と、慌ただしく部屋を出て行った。

美也は安堵した。どうやら仕事が終わるさうだ。偉い人の面接まであるとは思わなかったが、念入りにコテを当てたブラウスを着てきて良かった。



「それじゃ、明日から来られますか」

久留米旭屋デパート洋装品販売部の係長、武谷は、丸眼鏡を紐で耳に掛けている。実直そうな、四十くらいのお男。次郎より背は低い、肩幅は広くがっちりしていて、脚はガニ股である。何年か前に次郎さんと観た映画のチャップリンとかいう喜劇役者に似ている、と美也は思った。

「早速で申し訳ないですが、人手が足りないもので」

「はい、ではあの……明日、品物を取りに来たらよろしい

んですね、補正の……」

「は？ ホセイ？」

武谷は、度の強い眼鏡の奥の小さな目をぱちぱちと瞬く。

「はい、補正の請負をさせてもらえると、あの……衛藤さんのご紹介で」

途端に、カクンと顎が外れたように口を開けた。

「あちゃあ、そっちの衛藤さんか」

「はい、合川町内会長の衛藤さんです」

「いやあ、別嬪さんやもんで、てっきりうちの人事の江藤さんの送り込んだマネキンさんかと思うて」

武谷は頭を掻いたり、上を向いてタハと笑ったりして、また美也に向き直ると、

「すんまつせん、勘違いしとりました」と詫びた。人の好きなような笑顔に、美也の緊張が解け、笑みがこぼれる。

「いやあ、ばってん、補正の下請けよりマネキンの方がうんと稼ぎますよ。部長面接も合格したけん、良かったやないですか」

「え？」

「勘違いも怪我の功名ですな。運が良かったとですよ、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

「古賀さんがあげん簡単に合格出すっちゅうのも、案外

珍しかとですよ」

「はあ、そうですか。でもあの……」

ちぐはぐなやり取りの後、美也は結局、武谷に押し切られて、帰途についた。翌日から、デパートの洋装売り場で販売員することになってしまった。

「お母さん、綺麗なあ！」

「オタータン、キレイカア」

持って帰った販売員の制服を、鏡台の前で着てみたら、子どもたちが歓声を上げた。明るい紺色のツーピースで、後ろの真ん中にプリーツの入ったタイトスカートは、まだ二十八歳の美也によく似合っている。

亮子と晶子は、寄ってきて生地を撫でたり、頬を紅潮させ、母を賛美の目で眺めたりしている。勇だけは何も言わず、恥ずかしそうに、くにかくにやと体を揺すっている。

「勇、どうね」

「うーん、なあんか、おかしか」

「なんがおかしかと？」

「なあんか、僕のお母さんじゃなかごたあ」

勇が首を何度も傾げて赤い顔でそう言ったので、美也は笑い出し、勇を抱き寄せる。いがぐり頭を撫でて、「お母さんは、いつも勇のお母さんよ」と言った。

「明日から、おりこうにお留守番が出来るね？ 亮子姉ちゃんが学校に行つとる間は、おばあちゃんとアッコが怪我せんよう、勇が守つてやらんといかんとよ」

勇は怒つたように唇を一の字に結び、大きくこつくりと頷いた。

「いらつしやいませ」

「こちらのワンピースなど、いかがでしょう。フレアーを贅沢に取つてありますので、モダンですよ」

年輩のベテラン販売員、糸田郷子^{いとだきょうこ}が手本を示してくれた。太っているが機敏に動く人で、客への応対が上手い。微笑み方、頭の下げ方、品物の勧め方、すべてにコツがあると糸田は言う。

「バカ丁寧になつたらいかんとよ！」

「はい」

「客が二つ比べて迷いよつたら、とにかくどつちか一つを勧める！」

「はい」

「ほら、ボサートと立つとらんで！」

客にあんまり近づくとは急かすようだからと美也が遠巻きにためらっていると、何度も糸田から尻を叩かれた。ほとんどの客が試着もせず、ただ冷やかに見ていくだけで、

屋になった。

「ああ、今日は売上げの悪か！ 西山さんちや賢そうばつてん、案外気の利かかんね」

「すみません……」

糸田は、二重顎を引き、腫れぼったい瞼の下細い目で美也を睨む。

美也は、外で働くのも、接客するのも、初めてである。客が手ぶらで帰るたびに糸田になじられるので、仕舞いには頭に血が上つたようになり、フラフラしてきた。

昼休みに売り場の奥にある従業員控え室でおにぎりを食べ、手洗いに行くついでに屋上に上がってみる。そこに小さな遊園地があることを美也は知っていた。

エレベーターを降り、金魚鉢の並ぶ園芸店を通り抜け、屋上への階段を上る。開け放たれたガラスドアの向こう側から、モワリとした温風が吹き、賑やかな音楽が聞こえてくる。

照り付ける九月の日差しの中、額に手を翳^{かざ}し、目を細めた。機関車の遊具で子を遊ばせる若い夫婦の姿を、うっとりと眺める。絵に描いたようにモダンな洋装の若夫婦。紺色のリボンのついた麦藁帽子を被つた五歳ぐらいの男の子が、嬉しそうに甲高い声を上げている。

あの家族は、まるで四年前の私たちのようですね、と、

心の中で次郎に話しかける。

目を閉じると、まだ、ありありと思い出すことが出来る。早朝から設計図面を引いていた次郎が、珍しく、「良いところへ連れて行こうか」というようなことを言い、家族を引っ張ってここへ来たことがあった。次郎が亮子の手を引き、美也が勇をおんぶ紐で背負うていた。亮子は、次郎に抱かれて小さな機関車に乗り、歓声を上げる。わずかに直径五メートル程度の線路をくるくると回る機関車から、美也の前を通るたびに亮子は身を乗り出して手を振り、大喜びする。次郎も八重歯を見せ、少年のように笑っていた。一点の曇りもない笑顔だった。

なぜ、あの幸せが続かなかったのだろう。

美也は、次郎が大怪我をしたという知らせを聞いた時のことは、覚えている。国立病院へ駆けつけ、ほんの数時間前と別人のようになった次郎を見た。その後の記憶は、雲で覆われたように朧げである。子どもたちと引き剥がされるようにして伯母の千代の家に戻され、ある日、壽賀が迎えに来た。気付いたら逃げるように久留米に戻っていた。自分の身に起きた出来事なのに、記憶が途切れ途切れなのだ。まるで悪い夢を見ているようだった。そして、その悪夢は今も続いているのだ、と美也は思う。目覚めた時、目の前に次郎が立っていたのなら、どれほど幸せだろう。

「次郎さん。どうして急にいなくなつたんですか」

美也は機関車で遊ぶ家族に背を向け、フェンスに縋^{すが}つて肩を震わせた。

「酷いもんよねえ」

後ろから声を掛けて来たのは糸田だった。糸田の視線は、フェンスの外に向けられている。

「見事に焼き払われたもんだい」

遊園地を囲むフェンスは高く、二メートルほどある。そこに張り巡らされた金網に指を掛け、寄り掛かるようにして、糸田は溜息をついた。

「あすこらへんに、うちがあつたとよ」

糸田の指した場所は、一面の焦土と化していた。焦げ茶色の焼け跡の所どころにトタン屋根のバラック小屋が見える。元の住民が焼け跡に建てたものらしい。デパートとたつた一本の道を隔てた先は別世界なのだった。

美也はその光景を改めて不思議に思った。なぜ、明治通りから北側だけ焼き払われたのだろう。どう見ても、この大通りを目印に攻撃しているように思われる。

八月十一日。銀色の戦闘機がバラバラと豆でも撒くように焼夷弾を落として行った。美也はその真下にいたのだ。あの恐ろしい空襲から、まだひと月も経っていない。ところが、この屋上遊園地には朗らかな音楽が流れ、洋装売り

場に訪れる客も増えてきた。人間は遅しいのか、非情なのか。つくづく奇妙な生き物だ。

美也はふと、佐吉のことを思い出す。あの日、佐吉に出くわさなかったら、自分は焼け死んでいたに違いない。けれども、あの男は蓮田で……。

忌まわしい記憶が蘇る寸前、ブルッと身震いし、回想を断ち切る。糸田が怪訝そうに美也を見た。自分が糸田に返事もしないでいたことに気付いて、美也は慌てて口を開く。

「あ、あの……糸田さん、ご家族は？」

聞いた後ですぐに、しまった、と後悔した。あの日、焼死した市民も大勢いたのだから。けれども糸田は朗らかに言った。

「うん、うちは早うから大善寺のじいちゃんがたに疎開しとったけんね、みんな無事やったよ」

「それは良かったですね！」

美也は胸をなでおろす。

「西山さんがたは、どうやったと」

「はい、うちは合川町ですけど、子ども三人と義母と、お蔭様でみんな無事でした」

「そりゃあ、何よりたい」

糸田も、パッと笑顔になる。

「ご主人は？」

「え」

「戦地に行かっしやったと？」

「いえ……」

「あら、赤紙来んかったん？」

「いえ、主人はもう開戦の前に、怪我が元で……亡くなつてりました」

「あちゃあ、ごめんなさい、そら知らんやった……」

糸田は口を手で覆い、心底から済まなそうにした。美也は大人げないと分かっている、目が潤んでしまった。夫が亡くなったことを言葉にすると、嫌でもその事実を思い知らされ胸が塞いでしまう。

午後の業務に戻ると、糸田は急に親切になった。商品知識を丁寧に教えてくれ、気難しそうな客が来れば、さーつと寄ってきて交代してくれる。十日ほど経った頃、帰ろうとする美也に、大きな風呂敷包みを持たせた。

「大善寺から、山んごと野菜ば貰うたよ。食べて加勢してね、重たかろうけど」

「こんなにいただいいていいんですか？」

「よかよか、息子が復員すること、善行ば積みよつと。アツハハハ、貰い物ばたらいまわして善行ちゅうのも、虫のよか話ばつてん」

「ご無事で復員されますよう」と、深々と頭を下げる。糸

田は黙って頷いた。

もし次郎さんが出征していてまだ帰っていないのだったらどんなにいいだろう。つらくてたまらないだろうけれども、生きて帰ることを日々待ち望むことが出来るではないか。糸田に対して失礼と思いつつも、美也はついそんなことを思ってしまった。

デパートを出た途端、焼け付くような日差しに晒される。明治通りの並木は空襲で焼け焦げた。日陰を求め、美也は駅まで続く商店街の軒下を歩くことにする。

西鉄久留米駅から旭屋デパートまで一キロ半ほどの距離が、商店街になっている。北側の明治通り沿いと、平行して走る細い路地だが、乾物屋、八百屋、本屋、魚屋と賑やかな通りである。デパートが開店したのは昭和十一年で、美也が次郎と祝言を上げた年だった。あれから九年。次郎と出会った頃から数えればちょうど十年になる。

あまりにもいろんなことがあった……。

美也は、新しい職に就いた高揚感から、そんな感慨に耽っていた。そこへ、いきなりの罵声を浴びたので、驚いて飛び上がった。声は下から聞こえた。見ると、目の前に男がいる。ペタンと地面に座っている。

「てめえ××が……」

男はまた叫ぶ。卑猥な言葉を吐いている。美也が立ち止まると、目の前の地面に座った男は、ずるずると衣類の裾を引き摺って近づいてきた。きやあ、と何人かの通行人が飛び退った。美也は足がすくんで動けない。

「きさん（貴様）××……金よこせ××……」

美也は、目を見開いたまま、震える手でがま口から十銭玉を何枚か出し、男の前に置かれた箱に入れた。あんまり慌てたので、乱暴に投げ入れたような仕草になった。

「命がけでお国ば守って帰ってきたら、こげんか目に遭う」

男が急に静かな声で言った。美也は、動転してどう答えたらいいのかわからない。見ると、男は両足の膝から下がない。復員兵なのだろう。何日も風呂に入っていないらしく、異臭が立ち上っている。

「すみませんでした」

美也は男に詫びて、立ち去る。彼に何を謝っているのか判然としないが、申し訳ない気持ちになったのは確かだった。踵がジンジンするほど急いで歩いた。振り返ることも出来ずひたすら歩き、西鉄久留米駅の雑踏に紛れた時、やっと立ち止まってハアハアと息をついた。

駅から更に一キロほど国道を歩き、側道へ折れて北へ一

キロ、更に畦道を阿弥陀くじのように辿って帰ってくる美也の姿を見つけると、勇と晶子は一目散に駆けて来る。ズックが泥だらけになるから止しなさい、と言っても聞かず、毎日盛大に出迎えるのだ。亮子は姉らしく門扉の前で待っている。

「お帰りなさい、もう風呂沸かしとるよ、米も研いだよ」
「まあ、ありがとう、偉かったねえ！」

亮子の成長は目を見張るほどだ。

美也は、勇と晶子に纏わりつかれながら、抱えてきた包みを台所の流し台にどさりと置いて開いた。新聞紙の中から土の匂いが立つ。隆々としたヒゲ瘤だらけのサツマイモが四、五本と、見事に大きな南瓜が一つ、入っていた。両方をサイコロに切ってイリコの出汁でほっくり煮てやろう、と美也は嬉しくなる。芋と南瓜の炊き合わせは、子どもたちの好物なのだ。

「わあい、お芋、お芋」

「ワイー、オイモ、オイモ」

「やったあ、南瓜、南瓜」

「ヤッタア、カボタ、カボタ」

勇と晶子は、美也が帰宅すると、嬉しくてたまらない様子で、何を見てもはしゃぐ。虚弱で発語も遅れていた晶子は、この頃ようやくおしゃべりが上手になってきて、勇の

言うことを、甲高い声で繰り返す。

「ああ、もう！ やかましかねえ」

疲れた美也が笑い泣きの悲鳴を上げると、亮子が言った。「二人でずーっと何回も、国道まで行つては帰り、行つては帰り、しよつたとよ。怒らんでやって、お母さん」

美也は、凜とした亮子の顔をまじまじと見た。母親が勤めに出るなんて、子どもたちには初めてのことなのだ。さぞかし寂しいに違いない。そして、亮子はまだ八歳だというのに、子ども同然に手がかかる祖母、壽賀の世話を焼き、弟妹の面倒を見ながら留守家庭を守っているのだ。ああ、この子は！

美也は思わず亮子を抱き寄せ、艶々と光るおかつば頭を撫でる。

「偉いねえ、亮子は」

言いながら涙声になってしまった。亮子も、母親に抱かれ、緊張が解けると途端に、クスン、クスンとしやくりあげた。勇と晶子も、ワーツと飛びついて来た。

勤め始めてひと月ほど経った頃だった。壽賀が発熱した。咳が止まらない。

美也は、向かいの衛藤の家の電話を借りてデパートへ欠勤の連絡をし、バスで国立病院へ、壽賀を連れて行った。

レントゲンを撮り、誤嚥性肺炎だと言われた。

「嚥下がうまくいかなくなってきたようですね」

髪も眉も白い、初老の医師は言った。

「だいぶ回復していると思っただんですが」

「ええ、一酸化炭素の中毒症状は治まったんですがね、脳性麻痺が残ったので、いろんな機能に衰えが出てくるんですよ」

医師は見た目より若々しいきつぱりとした口調で言った。美也は、困ったなと思った。

「あの、今日は勤めを休んだのですが、明日からも何日かは難しいですか？」

医師は、驚いたように美也を見た。

「すると、普段は付き添っていないんですか？」

「子どもが二人、一緒にいます。小学校に上がる前の子ですが」

医師は瞠目した。

「危ないなあ、そりゃあ。何かあったら間に合いませんよ」

医師は看護婦長を呼び、壽賀の入院を勧めるよう言った。五十代くらいの痢かえの強そうな婦長は露骨に顔を顰しかめた。

「先生、満床なのご存じですよね」

「知っているよ。しかし、この人は重篤なんだ」

壽賀は火照った顔で、息も苦しそうだ。婦長も、以前入

院していた壽賀の症状を知らないわけではない。とうとう折れた。だが、刺々しい口調だった。

「分かりました。では、八人部屋に九床入れるよりありませんね！」

こうして、壽賀はそのまま入院することになった。

美也は午後、デパートに顔を出し、武谷係長に給料の前借りを頼んだ。武谷は、「今のご時世、よくあることです」と言ったが、勤め始めて早々の借金に、美也は顔から火の出る思いだった。

翌日も休みを取り、美也が壽賀の世話を焼いた。国立病院は、空襲で大火傷を負った患者で埋め尽くされている。膿の匂いか、壊死した体の匂いなのか、硫黄のような腐った野菜のような嫌な臭いが、古びた石造りの病棟にどんよりと溜まっている。

美也は、眠っている壽賀の横に付き添って、点滴の滴を眺めているうちに、うとうとと夢を見た。夢の中では、ベッドの向こう側に次郎が立って、「母さん、母さん」と、壽賀に呼びかけていた。

夢の中の美也はなぜかそこに次郎がいることを当然と置いて、「次郎さん、明日は仕事の帰りに石鹸を買ってきてくれませんか」と言い、次郎も普通の顔で「ああ、分かったよ」と返事をした。

美也は目を覚まし、朦朧とした頭で、この世界には、すぐ近くを並行して走る線路のようにもう一つの世界があつて、そこでは次郎さんが何事もなく元気でいるのに違いがない、と思つた。もう一人の美也が羨ましい、と痛切に思う。ああ、その美也と入れ替わりた。

「次郎！」

突然、壽賀がはつきりとした声で叫んだ。義母の夢にも次郎が現れたのだらうか、ついさっきの私の夢と、義母の夢の世界は、つながっているんだらうか、と、美也は不思議な気持ちができる。立ち上がつて覗き込むと、壽賀の目に明晰だった頃の光が宿っている。

美也は、壽賀の額に載せた手ぬぐいを洗面所の水道で洗つてきて、また載せてやつた。

「ありがとう……」

壽賀は、そう一言だけ言い、美也をしばらくじつと見て、また目を瞑つた。美也を見て、息子嫁だと分かつたのかどうかは、定かではない。

ほんの三月前まで、髻^{まげ}を結い、粋な半襟を付け、歌会では選者を務めていた義母である。あの大輪の牡丹のようだった壽賀がこんな目に遭うなんて、運命は、いいえ、戦争は、むご過ぎる。美也は萎れて小さくなつた壽賀の手を取り、そつと摩^さつた。

翌日は出勤せねばならなかった。看護婦長が、「人手が足りないんだから、完全看護なんて無理ですよ」と、すごい剣幕で言うので、亮子に付き添いをさせることにした。病院から学校に電話をすると、亮子の担任教師は、校舎はまだ授業の出来る状態ではなく、瓦礫撤去などの奉仕作業が主だから休んで構わないと言つた。

「何の音沙汰もないまま登校しない子どもも大勢いますよ。まして、おばあさんの介護なら立派なことですから」と、同情的だ。

「来週からは行かれますので、よろしくお願いします」
そう言つて受話器を置いた後、美也は決心して大分の母トヨに電話をかけた。もう、他に方法はなかった。

トヨは翌々日にやつてきた。風呂敷にたくさん、浴衣やタオル、美也の頼んでおいた洗面器や石鹸、子どもらへの菓子まで持つてきてくれた。

「すぐに飛んできたかつたけど、お父さんがねえ……」と、絹^{ちう}の着物の襟から手ぬぐいを突っ込んで汗を拭く。病室は蒸し暑く、開け放たれた窓から吹き込む微風も、湿つて生温かつた。

「お父さんが、行くなち言うたん？」

父は駆け落ちをまだそんなに怒っているのかと、打ちの

めされたが、トヨは首を振った。

「いいや、そげなことやのうて、お父さん、ここの具合が悪うなったけん」

トヨは右手で左胸を押さえた。

「心臓の発作よ」

「はあ？ そんなら、お母さん、出てきて良かったん？」

美也は、おろおろと母の腕にすがる。

「良かよ、もう去年からなんべんもあつたけん」

「ええつ、なんべんも？」

トヨも初めは腰を抜かしそうに驚き、心配したが、二度目、三度目、と発作が重なるうちに慣れてきたのだと言った。医者も、まるで風邪薬のように舌下錠を処方し、「ではお大事に」と家に帰すそうだ。美也は聞いているだけで、動悸が打つような気がした。中津の実家の薄暗い座敷の大きな梁の下で、小さな膳を前に、ボソボソと食事をしている父の姿が目につかぶ。その姿も、もう自分の知っている壮年の父ではないのだろうと思うと切なく、胸が痛んだ。

「やつぱり、お母さん、帰ってあげて」と、美也は言った。自分も窮地だが、父に万一のことがあつたら取り返しがつかない。

「はいはい、そげん言うち思うた。ばってん、せつかく出てきたけん、亮子たちに会って明日帰るちゃ。お父さんの

ことは美土里やら律子さんやらにも、よろしゅう頼んじきたけん」

律子さんというのはあによめの嫂で、兄夫婦は実家からすぐそばの酒蔵の裏に所帯を持っている。気丈そうな人だったが、はたして舅の様子に気を配ってくれるような人だったかどうか、美也は心許ない。

その晩は家をトヨに任せ、美也は壽賀の病室に付き添った。夜になると、また熱が上がり、ゴロゴロと気管から音がして息苦しそうだ。看護婦が夜中に何度も検温し、痰を吸引しに来了。酸素マスクを当てられ、血の気が失せていた唇の色が良くなった。

翌朝、咳がやや収まり、重湯の朝食がきた。看護婦が来て、ゆっくり、ぐくんと飲み込むことを、まるで幼児に教えるように丁寧に指導する。壽賀は子どものように、うんうん、と返事をして、粥を食べた。終わると、惜しそうに舌で唇を舐める。点滴だけで空腹だったのだろう。

食後は横たわって、壽賀はぼんやり窓の外を見ている。病室は二階にあり、ガラスの向こうには楠の太木があった。鬱蒼と茂る葉の間から、クマゼミの声が遅しく響いている。その上には、目の覚めるような青空がひろがっていた。

壽賀は何を想っているのだろうか。ひよっとしたら、壽賀の目は、かつての荒戸の自宅の庭を眺めているのだろうか

か。百日紅や楓や南天が、美しく配置されていた坪庭。

美也は、緊張して壽賀と向かい合った日のことを思い出す。後日、次郎から聞かされた。縁談を断った次郎に、想い人がいるのなら連れて来いと壽賀が言っただと。一人息子の連れてきた気の利かない田舎娘を、「正直な人は好きよ」と、壽賀は大らかに迎えてくれた。

義母は片目をつぶってくれたのだ、と美也は思っている。壽賀が繊細な観察眼を持つていることは、彼女の詠む歌に表れていた。自分などは到底及ばない高遠な山河のような人だ、と美也は尊敬していた。だから一層、脳を病んだことが痛ましくてならない。

「お義母さん、お元氣になられたら、私に歌詠みを教えてくださいな」

「私、次郎さんに歌を贈られて、お付き合いが始まったんですよ。あら、こんな話、初めて打ち明けたかね」

美也は、反応のない壽賀に訥々と話しかけながら、洗面器に湯を張り、絞った手ぬぐいで体を拭いてやる。柘植の櫛で髪を梳き、手鏡に映してやると、壽賀はにっこり笑った。

その日、トヨは一旦病院に寄り、虚ろな顔の壽賀に向かって丁寧に挨拶すると、大分へ帰って行った。菓子折りを看護婦室に、子らには晩ご飯を作り置きして来たという。

その上、トヨは千円という大金を美也に握らせた。

「これは私のへそくりやき、お父さんにゃ内緒よ」と、人差し指を口に当てた。

何と有難いことか。これで壽賀の入院代を払える。給料の前借りも返し、子どもらの学用品を買っても余る。来春の勇の入学に備えて蓄えておこう。

美也は病院の玄関に降りてトヨを見送った。トヨは眩しい光に手を翳し、何度も振り返りながら帰っていく。蟬が降りしきるように鳴いていた。

病室へ戻ると、先刻の医師ともう一人の若い医師、数人の看護師が壽賀のベッドを囲むように立っていた。

「すみませんでした、外してしまつて」

美也は恐縮し、詫びを言つた。だが、誰も返事をしない。白髪の医師が、しばらく壽賀の脈を取り、厳かとも感じられる低い声で言つた。

「脈が弱つとりです。ご親類など呼ばれるのであれば」

「えっ」

と言つたきり、美也は二の句が継げない。今朝からお粥の食事として、さっきは笑顔も見せてくれたというのに。

壽賀の親類で、美也が連絡先を知っている者はいなかった。壽賀には、京都に嫁いだ妹がいて、かつて次郎と盆の

帰省をした折、一度だけその夫婦と顔を合わせた。吉田という苗字だったのは覚えていた。だが、その程度だ。

それに、美也は、大分にはもう連絡をするまい、と思った。母には父の傍にいて欲しいからだ。美也が返事に窮している、と、

「かわいそうに、混乱しとんなさる」と、婦長が言った。

「あの……義母の家は大濠なんです、もう、分からないんです、親戚の住所も何もかも。六月の空襲で家ごと焼けてしまつて……」

ようやく、美也は絞るような声で言った。

「ああ、なるほど。今は、そういう人が多いですもんね」医師は溜息をつく。美也は、はっと顔を上げた。

「でも、子どもたちを呼んできていいでしょうか」

「それがいい。おばあさんにお別れをさせてあげなさい」

美也が三人の子を連れて病院へ戻ると、壽賀は、看護婦室の隣の個室に移されていた。鼻腔にチューブが通され、点滴や心電図の管やコードが何本も、壽賀の手足から伸びている。

勇は、病室に入るやいなや、顔色を変えて壽賀に駆け寄った。

「おばあちゃん！」

壽賀が薄く目を開く。勇の顔を認めると、酸素マスクの中で微かに、「次郎」と呼んだ。

「はいっ、次郎が来たよ、ここにおるよ！」

勇は、壽賀の腕を叩いた。「あつ、駄目よ」と美也は慌てて勇を押さえる。勇は怒ったように叫ぶ。

「おばあちゃん、死なんでよ、次郎が来たけん、死なんでよ！」

美也は胸が詰まる思いで、勇を後ろから抱きしめた。

亮子は、そつと壽賀を覗き込み、

「おばあちゃん、ごめんね」

と言った。

「どうして謝ると、亮子」

美也が尋ねると、亮子は鼻を吸り、ひつくひつくとしやくりあげ始め、とうとう声を上げて泣き出した。

「この前ね、亮子が学校に行かれないとおばあちゃんの所為やけんね、つて、文句言うたと。小さな声で言うたことやけど、きつとおばあちゃんには聴こえとつたつちや……。それで、それで……」

亮子は途切れ途切れにそう告白すると、いやいやと首を振りながら、一層泣きじやくった。美也は、こんな幼子にあまりに重い荷を背負わせたことを悔いた。